

日本組織培養学会
平成6年12月20日

会員通信
第83号

発行責任者
※宇田川康博（慶應大医学部）
佐藤 靖史（東北大加齢医学）
増井 徹（京都大医学部）
※〒160 東京都新宿区信濃町35
慶應大学医学部産婦人科
電話 03-3353-1211 内2386
Fax 03-3226-1667

§ 第68回日本組織培養学会開催案内

第68回日本組織培養学会を下記の予定で開催しますので、奮ってご参加ください。今回は、一般講演に力を注ぎ、この学会が研究会であったころの初心に帰って各人の講演と討論時間をできるかぎり長く取れるように学会運営を設定したいと思います。また、次の4分野（1.生体ストレス反応、2.機能発現培養、3.遺伝子発現調節、4.細胞周期）について特別に演題を募集しますので参加申込書に明記してください。細胞培養全般に渡る会員各位の積極的な話題提供をお願いします。なお、全く同じ時期に長崎で2,000名規模の神経内科学会が開催されます。長崎は、観光地でありながら宿泊ベット提供能力が極端に少ないので、早めに予約されることをお勧めします。下記、日本旅行長崎支店に申し込まれますと学会特別価格で提供してもらえます。

期 日 平成7年5月17日（水）～19日（金）

学会予定 5月17日午前10時より シンポジウム
“植物と動物を分けるのはなにか？”
5月18日 一般演題、総会、懇親会
5月19日午後4時まで 一般演題

開催場所 長崎厚生年金会館
〒852 長崎市茂里町3番20号（JR浦上駅西隣）
電話番号 0958-45-0860

申込締切 講演申込締切 平成7年1月31日
講演要旨原稿締切 平成7年2月7日
参加申込締切 平成7年5月1日（当日参加も可ですが準備の都合上、出来るかぎり事前にお知らせ下さるようお願いいたします。）

大会事務局 長崎大学薬学部放射薬品学
〒852 長崎市文教町1番14号
大会専用電話およびファクシミリ 0958-44-5504
E-mail nabe@net.nagasaki-u.ac.jp
世話人 渡邊正己 事務担当 奥喜美子

宿泊案内 日本旅行長崎支店 担当 木津好洋
電話 0958-26-9307 ファクシミリ 0958-25-8552

参加登録用紙

日本組織培養学会第68回大会

平成7年5月17～19日

この参加登録用紙に必要な事項をご記入のうえ、郵便、ファクシミリあるいはE-mailのいずれかで大会事務局までお送りください。発表を申し込まれた方には、折り返し講演抄録作成用紙をお送りします。

送り先：〒852 長崎市文教町1番14号

長崎大学薬学部放射薬品学教室内 Tel & Fax : 0958-44-5504

日本組織培養学会第68回大会事務局 E-mail nabe@net.nagasaki-u.ac.jp

渡邊正己

参加登録票

事務局使用欄：受付番号

受付日時

氏名：

所属：

住所：

電話：

ファクシミリ：

E-mail address：

以下必要に応じて□に印を付けてください。

学会参加費

懇親会参加費

会員 5,000円

6,000円

非会員 7,000円

学生 3,000円

発表の有無：有 無

(発表する本人のみ発表有とし、共著者は無とする。)

発表論文タイトル：

発表者：

発表論文のカテゴリー： 1. 生体ストレス反応

2. 機能発現培養

3. 遺伝子発現調節

4. 細胞周期

5. その他

1. 项目背景与意义
2. 项目目标与范围
3. 项目组织与职责
4. 项目进度计划
5. 项目风险管理

项目组织与职责

项目经理：负责项目的整体规划、组织、协调、控制、监督和评价。
项目副经理：协助项目经理完成项目管理工作。
项目成员：负责项目具体任务的执行。

项目风险管理：识别、分析、评估、应对项目风险，确保项目目标的实现。

项目进度计划：制定项目进度计划，明确项目各阶段的任务、时间、资源等。

项目风险管理：识别项目风险，分析风险发生的可能性及影响，制定应对措施。

项目风险管理：识别项目风险，分析风险发生的可能性及影响，制定应对措施。

项目风险管理：识别项目风险，分析风险发生的可能性及影响，制定应对措施。

§ 日本組織培養学会・細胞工学シンポジウムのご案内

細胞工学委員会委員長

小山 秀 機

前回の会員通信でお知らせしましたように、来春1月東京で下記のごとく細胞工学シンポジウムを開催します。奮ってご参加ください。

記

テーマ：セル－セル インターラクション －細胞社会のしくみをめぐって－

場 所：持田製薬本社2階、ルークホール（東京都新宿区四谷1丁目7番）

日 時：平成7年1月20日（金）10:30～16:30

プログラム

- 10:30 挨拶 細胞工学委員会委員長
- 10:35 挨拶 日本組織培養学会会長
- 10:40 榎並淳平（全薬工業研究所バイテク研究室）
乳腺における細胞間相互作用
- 11:10 三井洋司（工業技術院生命工学技術研究所）
血管の収縮における内皮細胞と平滑筋細胞のインターラクション
- 11:40 昼食
- 12:40 三宅健介（佐賀医科大学免疫学）
マウスB細胞の分化、増殖および死滅に関わるB細胞の表面分子
- 13:10 小玉博明（奥羽大学歯学部口腔解剖学）
造血幹細胞と骨髄間質細胞の細胞間相互作用
- 13:40 仲野 徹（京都大学医学部医化学）
インビトロにおけるES細胞から血液細胞への分化誘導
- 14:10 休憩
- 14:30 松居靖久（東北大学加齢学研究所細胞生物学）
始原生殖細胞の移動、増殖、分化
- 15:00 工藤佳久（三菱化学生命科学研究所）
シナプス可塑性におけるグリア細胞の役割
- 15:40 八杉貞雄（東京都立大学理学部生物学）
消化管の分化における上皮と間質の相互作用
- 16:10 総合討論
- 16:30 閉 会

§ 1995年度第10回秋季シンポジウムのお知らせ

近年、性ステロイドホルモンに関する研究は、*in vitro*培養系を用いて著しく進歩を遂げております。これらの研究分野は、子宮体癌、乳癌、前立腺癌などホルモン依存性癌に関する研究、胎児の発育や子宮内膜の脱落膜化などの生殖医学、卵巣・精巣・下垂体からの直接あるいは間接的なホルモン分泌動態、などの多岐にわたっています。

*in vitro*培養研究の専門学会である我が日本組織培養学会が主催して、このように多方面に渡る性ステロイドホルモン研究の専門家に討議の場を提供することは、大変有意義なことと考えています。きっと、期待に違わず、最先端の発表と議論が展開されることと期待しております。

会員の皆様方には、今から御予定に組み込んで頂くようお願い申し上げます。

記

名称ならびにテーマ：International Symposium on “Sex Steroid Hormone Action in vitro Culture System”

会 期：平成7年11月20日（月）～22日（水）

会 場：東京ガーデンパレス

東京都文京区湯島1-7-5 電話（03）3813-6211

発表形式：国外・国内招請シンポジスト各々約15名

一般公募ポスター

第10回日本組織培養学会秋季シンポジウム

代表世話人 蔵本博行

§ 平成6年度第2回日本組織培養学会幹事会議事録

日 時：平成6年11月12日（土）9時～12時

場 所：金沢大学薬学部内会議室（石川県金沢市）

出席者：蔵本博行（会長）、大野忠夫（兼細胞バンク委員会委員長）、宮崎正博、浜口和之、佐藤靖史、渡辺 純、秦 宏樹（以上現幹事）、星 宏良（編集委員会委員長）、小山秀機（細胞工学委員会委員長）、沖垣 達（研究教育システム委員会委員長）、松村外志張（細胞バンク委員）、鈴木文男（第9回日本組織培養学会秋季シンポジウム世話人）

1. 報告事項

1) 会長報告（蔵本会長、兼第10回日本組織培養学会秋季シンポジウム世話人）

①平成7年度(第10回)日本組織培養学会秋季シンポジウム開催予定

日時:平成7年11月21日(火)~22日(水)

場所:日本私学共済『湯島ガーデンパレス』

テーマ:『Sex steroid hormone action in vitro culture system』

②米国組織培養学会の名称が、『The Society of In Vitro Biology』と変更された。

2) 庶務報告(秦 宏樹庶務幹事)

新入会者・退会者(平成6年5月~平成6年10月)

入会希望者:3名(個人会員)

退会者:6名(個人会員)、1名(賛助会員)

3) 会計報告(宮崎正博会計幹事)

①平成6年度までの会費納入状況

685名(70%)が完納しているが、121名が2年以上滞納。

②各委員会への予算算出状況

各委員会委員長、会計幹事の変更の通知が不徹底のためスムーズに予算提供ができない。今後は庶務幹事がこの通知を徹底する。

4) 奨励賞選考幹事(渡辺 純幹事)

平成6年9月末までに、4名の応募者があり、2名(小池学先生、安部まゆみ先生)が選出された。

5) 会員通信幹事(佐藤靖史幹事)

平成6年度より『組織培養研究』と一緒に会員へ送付するようにしたため、自動的に年4回発行している。

6) 各種委員会報告

①編集委員会報告(星 宏良委員長)

i) 『組織培養研究』年4回発行

ii) 広告収入の減少があったが、発行にかかる諸経費の減少もあり、予算以内で発行可能である。

iii) 『組織培養研究』のactivityの問題

今回の秋季シンポジウム『アポトーシス研究の新展開』の演者の協力により、平成7年2号にアポトーシスの特集を掲載予定

iv) Current contentへの採用を努力していく。

②細胞バンク委員会報告(浜口和之幹事)

第4次細胞バンク委員会活動報告

i) 異なる所轄官公庁の細胞バンクの実質的統一化を計るための方策。

ii) DNA finger printing 法による細胞の同定法につきマニュアル作成。

iii) ウイルス感染の検出法

iv) 細胞バンクデータベースシステムの公開方策の4点につき検討中である。

③細胞工学委員会報告(小山秀機委員長)

平成6年度細胞工学シンポジウム開催予定

日時:平成7年1月20日(金)10時30分~16時30分

場 所：持田製薬本社 2 階、ルークホール、東京都新宿区四谷

テーマ：セル－セル インターアクション－細胞社会のしくみをめぐって－

④研究教育システム委員会報告（沖垣 達委員長）

『組織培養の技術』第 3 版の刊行準備状況：「基礎編」200頁、「応用編」250頁の 2 冊が、平成 7 年 4 月に発行予定であり、2 %が学会に上納される。

2 協議事項

- 1) 新入会希望者 3 名の入会が承認された。
- 2) 平成 7 年度より名誉会員として、山田正篤先生、黒田行昭先生の 2 名が蔵本会長より推薦され、承認された。
- 3) 平成 8 年度以降の日本組織培養学会大会世話人、秋季シンポジウム世話人につき、井出利憲先生（広島大学）、吉里勝利先生（広島大学）、西 義介先生（日本たばこ産業）、小山秀機先生（横浜市大）が推薦され、今後の検討事項とされた。
- 4) 奨励賞選考委員会の決定を受け、2 名（小池 学先生、安部まゆみ先生）の平成 7 年度日本組織培養学会奨励賞が、承認決定された。
- 5) 奨励賞選考規定につき、奨励賞選考幹事より問題点が指摘され、協議の結果以下の変更が決議され、次期総会に議題として提出されることが決定された。
 - ①第 3 条授賞対象者を、当該会計年度の 4 月 1 日現在で 40 歳未満で、かつ応募時点で日本組織培養学会の会員であることとする。
 - ②第 4 条発表期限を過去 3 年度以内にと期間延長する。
 - ③第 5 条応募方法に関し、応募期限は毎年前年度の 9 月末日までと繰り上げる。
この結果、奨励賞選考委員会が、前年度秋季シンポジウム時に開催されることになり、選考委員への旅費を予算として計上する必要が生じる。そのため平成 7 年度以降、特別会計から 10 万円計上することが提案・承認された。これは次回総会にて承認され次第、予算に計上される。また日本組織培養学会全体の活動をより向上させる目的で、以下の事項が提案され、庶務幹事が遂行していくことが承認された。
 - ①大会の発表者（非会員・筆頭演者）に対し、入会申込書・入会の勧誘書を送付する。但し入会を強要はしない。
 - ②大会発表者（会員）に、非会員共同演者の新入会書類を送付する。
 - ③大会発表者（会員）に、奨励賞の PR、奨励賞の推薦状を送付する。
- 6) 『組織・細胞培養におけるヒト組織・細胞の取り扱いについて』に関して細胞バンク委員会の中間報告書が、提出され、松村細胞バンク委員より趣旨説明がされ、その内容に関して 1 か月間の猶予期間をおき、会員に通知していくことが全会一致で承認された。今後以下の活動を行うことが決定された。
 - ①日本組織培養学会として学会内部（全会員）、外部（ヒト材料を扱う学会、施設、官公庁）にアピールしていく。
 - ②平成 7 年度大会時にワークショップを開催し、会員に趣旨説明・報告する。
- 7) 日本組織培養学会の名称変更について。
蔵本会長から、米国組織培養学会の名称が変更されたとの報告を受けて、日本組織

培養学会においても、検討することが提案された。そして以下の点で今後活動を行っていくことが、承認決定された。

- ①会員通信に米国組織培養学会の名称が変更されたとの報告を掲載し、会長よりその趣旨説明を行う。
- ②学会として、幹事会の下に小委員会を設立し、庶務幹事が人選を行い、次回幹事会で承認後発足し、会員全体の意見調整、新名称につき議論していく。

§ 第9回日本組織培養学会秋季公開シンポジウムを終えて

金沢大学薬学部放射薬品化学教室 鈴木 文男

秋深まる11月12日（土曜日）に、第9回目の日本組織培養学会秋季公開シンポジウムが金沢大学薬学部で開催された。ちょうど1年前に学会から、平成6年度の秋季公開シンポジウムの開催を金沢で世話してもらえないかとの連絡を受け、組織培養に関連したトピックスを中心にシンポジウムのテーマについて検討してきました。しかし、学会より財政的援助を受ける限り組織培養活動に有益なものであり、また招聘する演者に対して失礼にならない程度の参加者が望めるような内容でなければならないと考えていましたので、なかなか満足のいくテーマが見つかりませんでした。結局、最終的な方針が決まったのは岡山での第67回大会（4月21、22日）直前で、会員数が少ない金沢という地理的条件も加味して今話題のアポトーシスを取り上げることにしました。その後タイトルを『アポトーシス研究の新展開』として演者との交渉にかかったのですが、結果的には演者の中に組織培養学会の会員が一人も含まれないという変則的なシンポジウムとなりました。

哺乳動物の形態形成の昆虫の変態過程において観察される多数の細胞死は、正常の個体発生・維持には欠かせないものです。近年、これと類似した自爆型の細胞死（アポトーシス）が組織再生時や種々の外来因子（放射線や化学薬剤およびウイルス感染）によっても生じることが報告され、アポトーシスは多細胞生物が持っている本質的な自己保存の機構であることが明らかになってきました。ここ数年のアポトーシス研究の進展には目を見張るものがあり、一部ではそこに関与する遺伝子も同定され、分子レベルでの解析も急速に進んでいます。また、アポトーシス現象を癌治療やある種の感染症の防止に役立てようとする試みも開始されており、その研究成果は基礎生物学に留まらず、広く医学、薬学、農学等の応用分野にも影響を及ぼしつつあるのが現状です。そこで金沢でのシンポジウムでは、日本を代表する6人のアポトーシス研究者に最先端の研究成果を紹介してもらい、アポトーシス現象の生物学的意味を理解するとともに、そこに関与する遺伝子の役割を明らかにすることによりアポトーシス型細胞死の分子機構を展望することを目的として企画しました。

まず最初のセッション（プログラムされた細胞死としてのアポトーシス）では、胸腺細胞を例としてアポトーシス現象の特徴とそこに関与する遺伝子に関しての幅広い解説

があった後（山田武）、その最終過程に働いているエンドヌクレアーゼについての興味ある紹介がなされた（田沼靖一）。アポトーシスで見られる特徴的なDNA断片化とその誘導パターンは、アポトーシスに特異的なエンドヌクレアーゼ（アポトーシス・エンドヌクレアーゼ）の存在を強く印象づけるものでした。次のセッション（生体適応反応としてのアポトーシス）では、ウイルス感染によるアポトーシス誘導機構について集中的に討論が交わされた。インフルエンザウイルス感染によるアポトーシスに*Fas* 遺伝子（中西義信）、HIV感染によるアポトーシスにTNF（小林信之）が関与していることが見事に証明されました。いずれにせよ、ウイルス感染細胞のアポトーシスは、個体をウイルスから守る生体防御機構のひとつであるとする考えは極めて魅力あるものでした。

最後にセッション（アポトーシスの分子機構）では、アポトーシスを制御する*bcl-2* 遺伝子（辻本賀英）と*Fas* リガンドと*Fas* 遺伝子（長田重一）に関しての最新の研究成果が紹介された。両氏はアポトーシス研究をリードしてきた著名な研究者であり、最先端の技術を駆使しての明瞭なデータの数々には会場を圧倒するものがありました。それでも会場より多くの質問者があり、制限時間を越えての白熱した討論が交わされました。結局のところ、10分間予定していた総合討論を5分間に短縮して午後5時過ぎ全プログラムを終了することができました。

本シンポジウムを引受るにあたってまず憂慮した点は、北陸地方でのシンポジウムでは十分な参加者が見込めないこと、さらに経済的な不況下では資金集めが困難であることです。前者については話題性の多いアポトーシスという課題を設定し、一般受けする演者を招聘したことにより、予想以上の参加者（約170名）がありほぼ解決されました。しかし、後者についてはこの分経費がかさみ（演者がすべて学会員以外のため旅費全額支給）苦勞しました。結局、会場を薬学部内とし、会場運営をすべて教室員と学生の無料奉仕に頼らざるをえませんでした。この点、会場が不便で狭く、またシンポジウム参加者にスムーズな対応ができなかったことをご不自由をおかけしたかと思えます。この紙面を借りましてお詫びする次第です。ただ残念なことは、全国各地より多くの参加者があったにもかかわらず、組織培養学会員の参加が極少数であったことです。もちろん秋季公開シンポジウムが組織培養学会の宣伝と啓蒙活動の一環として開催されるという点からすると、今回のシンポジウムは理想的なパターンかもしれませんが、会場内に学会案内や入会申込書を置くとか、機関誌（*Tissue Culture Research Communications*）への投稿を宣伝する等の配慮があっても良かったのではと反省しているところです。次回の秋季公開シンポジウムでは、是非ともこの点が考慮されることを期待します。

最後に、このシンポジウムを開催するにあたり、蔵本学会会長をはじめ学会幹事の先生方に大変お世話になりました。学会の御援助のもとに、盛会裡に終えることができましたことを心よりお礼を申し上げます。

§ 日本組織培養学会の名称はこれでよろしいでしょうか？

会長 蔵本 博行

米国組織培養学会 (Tissue Culture Association, TCA)の前会長Dr.G.J.Darlingtonから、学会の名称をthe Society of In Vitro Biology に変えることになったとの連絡を受けました。私達が久しくTCAと呼び慣れていた名称の、突然とも云える変更に驚いています。伝統ある学会とは云え、時代に適応した学会名に、活発な議論のうえ、全会員の総意により決定された由であります。

ひるがえって、私共日本組織培養学会は、TCAに合わせて英文名をJapanese Tissue Culture Association (JTCA)としていることは御存じの通りです。その関係もあり、過日の幹事会で、敢えて「日本組織培養学会」と云う名称で良いかどうか、提案させて頂きました。討議の結果、大野忠夫庶務幹事を中心にワーキング・グループを結成して十分に検討することになりました。

この提案は、単に名前を変えることを目的としているのではなく、あくまでも私共の学会を一層活性化し、学問的に有用な学会とするためのきっかけとして頂きたいからです。どのように時代に即応し、どのようにして先端的な学問集団として活動して行くかを中心にして検討したいと考えています。

勿論、長年使い慣れた「日本組織培養学会」と云う名称に愛着を持っているのは私ばかりではないと存じます。また、名前を変えなくても先進的な活動は可能であることは云うまでもありません。例えば、現在でも細胞工学委員会などのように、培養研究の中でも最近進歩の著しい分野を積極的に極めて行く姿勢は持ち合わせているつもりであります。

どうぞ、会員の皆様方には、忌憚のない御意見と御議論を幹事あるいは私にお寄せ下さるようお願い致します。

§ 米国組織培養学会の今昔 — 学会名の改称に寄せて —

重井医学研究所細胞生物学部門
沖 垣 達

久しく“TCA”の愛称で呼び慣れていた米国組織培養学会 (Tissue Culture Association) が、本年その名称をthe Society of In Vitro Biology と改称した。複数の候補名から、この新名称を会員投票によって選択したはずである。私たちの日本組織培養学会 (米国ではJTCAと呼ばれている) と同様に、研究のみならず技法の開発や研修や教育に力を入れてきたTCAの名が失われるのは、古い会員たちにとってはノスタルジアを感じざるを得ないだろう。私の場合は、1963年に初渡米した折に、故C.M.Pomerat

先生から「着任のお祝いに会員にしておいたよ」といわれて以来のなつかしさを伴う学会ではある。いつれの学会も、常に時代を意識し、未来を読んで活動しているのだから、今回のTCAの改称も当然の行動とってよいだろう。

ところで、既に消失した名称のTCAは極めて独自の発展を遂げている。ここに少々長文に渡るが、かつての同僚A.N.Strond女史の学会記録からその創設について以下に引用しよう。

「TCA創立のいきさつを調べてみると、1946年の米国解剖学会に出席したGeyがPomeratに送った書簡がきっかけになっているようだ。それには“Porterが培養に関する興味ある論文を発表し^(註1)、Whiteもまた合成培地について報告をしている^(註1)”。われわれは組織培養に関する研究委員会を作るよう今一度提案しよう”とある。実はこの以前に同様の提案が何らかの理由でつぶされている事実がある。こうしてTCAの前身Tissue Culture Commissionが生まれ、米国学術会議の援助のもとに同年11月には第1回研究会がもたれている。当時の委員にはK.R.Porter, M.R.Murray, G.O. Gey, D.C.HetheringtonそしてC.M.Pomeratらの名が見られる。この会の使命は1) 培養液、培養方法の開発、改良、必要度に関する調査、そして2) Bibliographyの出版であった。その結果、学術会議の助成金を得て1947年から実際の活動が開始されている。1948、49両年の年会は米国解剖学会と共催で行われ、1949年に学会会則が制定されて、初めてTCAと名のつた。この頃には培養諸条件をテストする実験室が、Sloan-Kettering Institute内にもうけられている。研究所は場所と実験器具を貸与し、費用は全米対癌協会の助成金によった。ここでの一連の研究結果が、やがてDifco社から市販製品の第1号として売り出されることになる。Bibliographyの出版にはより多い時間と費用を必要とした。この事業はM.R.Murray女史の献身的な指導のもとに、学術会議とLederly, EliLilly両製薬会社の助成をうけて、1952年に第1巻が刊行されている^(註1)。またTCA主催の第1回技術講習コースは1948年にToronto大学で開かれ、NIHの助成金を得て16人の学生が参加した。以後毎年所を変えた講習コースは実に17年を長きにわたって継続し、現在指導的立場にあるすぐれた研究者を育成する温床となった。」

このような学会の伝統が、やがてNew York州北部のLake Placidに、学会が運営する研究所W.Alton Jones Cell Science Centerを生むことになる。また1946年の第1回学会参加者33名の中には3名のノーベル賞受賞者があり、他にも栄光ある学究として爵位を受け、あるいは大学学長にと所を得た先達の数は枚挙にいとまがないのもTCAの誇りであった。この学会は多くの委員会や地方支部を持ち、夫々が活動している。即ち、委員会としては規約、教育、会員制度、公報、視聴覚、標準化、細胞毒性、発生、編集、材料と安全性、将来計画、学生賞などがあり、部門としては脊椎動物、無脊椎動物、植物、毒性がある。他に地域別の地方支部がいくつか存在する。周知の通り、In VitroはTCAの機関誌ある。

近年の活動についてはご存知の方が多いと思うが、日本、欧州の関連学会と共同で準国際的な会議を主催するのが特色であろうか。こうしてみると、その歴史の長さや規模の大きさなどで、私たちの学会とは比較にならないものであることを思い知らされるがしかし、今年その名称を改めた裏には、それなりの理由があるのであろう。私見では、そのひとつは、同朋ともいふべき米国細胞生物学会(American Society for Cell Biology,

A S C B) の目を見張る台頭である。A S C B は J. Cell Biol. と Mol. Biol. Cell を刊行し、その大会は、事実上大型の国際会議といてよく、例年の商業展示が200社を越す有様である。本年11月のSan Francisco 大会での発表論文数は分子生物学関連も含め遂に3,000編を突破したと聴いている。

昨今のわが国の動向は、良くも悪くも米国のそれを追っている。科学界もその例外ではなく、私たちの学会もその例外ではないだろう。改称したThe Society for In Vitro Biology の今後を見守り、それをもって J T C A の将来に反映したい。言い換えれば、私たちにも新しい仕事はまだひとつ増えたのかもしれない。

- 注1. Anat.Rec.,94:490,1946 として発表された培養細胞の電顕像の報告であろう。
注2. Anat.Rec.,94:505,1946 およびN.Y.Acad.Sci. Ann.,49:111,1947-48として発表されたニワトリ胚と腫瘍のための既知物質による培地に関する報告であろう。
注3. 1884-1950の論文のリストを集大成したM.R.Murray 女史のこの労作は、私の蔵書では1953年発行となっている。

参考資料

- 沖垣 達 アメリカ組織培養学会とThe Alton Jones Cell Science Center.
採集と飼育, 34:14-18, 1972.
沖垣 達 追憶のCharles M.Pomerato 教授.
組織培養, 8:347-350, 1982.

§ 関東学会開催のご案内 第2回生命工学シンポジウム

Second International Symposium on Bioscience and
Human-Technology

主 催：生命工学工業技術研究所

会 期 3月8日(水)～3月10日(金)

会 場 工業技術院筑波研究センター共用講堂

Session I : Elucidation of Human Brain Functions with MEG (Magnetoencephalography)
Measurement

Session II : Gene Regulation of Biological Clock

Session III : Cellular Mortality and Immortalization

Session IV : Crystallization of Protein Supramolecules

上記各セッションにおいてそれぞれ4から6件の講演が国内外の研究者によって行われ
ます。

講演言語 英語

参加費：無料、講演予稿集配布

参加申込方法：当日参加も可能ですが、会場の都合上できるだけ事前に下記にお申し込み下さい。

申 込 先 〒305 つくば市東1-1 生命工学工業技術研究所
総務部 業務課 電話 (0298) 54-6037 FAX (0298) 54-6038

Second International Symposium on Bioscience and Human-Technology

March 8, 1995

Session I : Elucidation of Human Brain Functions with MEG (Magnetoencephalography)
Measurement

Chair: T.Takeda and M.Morabito

13:30-14:00

MEG research in NIBH

T.Takeda(NIBH)

14:00-14:20

3-D analysis of MEG data with applying AVS

M.Morabito(NIBH)

14:20-15:10

Functional relations of cortical olfactory area studied with MEG and MRI

G.Kobal(Univ.Erlangen-Nürnberg,Germany)

Break 15:10-15:20

15:20-16:10

Brain dynamics revealed by neuromagnetics approach

S.Kuriki, Y.Hirata, and T.Kobayashi(Hokkaido Univ.)

16:10-17:00

The relationship of MEG and EEG recorded in simple and multitask environment

-Linear and non-linear analysis of brain function-

H.Weinberg(Simon Fraser Univ., Canada)

March 9, 1995

Session II : Gene Regulation of Biological Clock

Chair: N.Ishida and M.Ishiura

9:40 - 9:45

Introductory Remarks

N.Ishida (NIBH)

9:45 - 10:25

Molecular genetics of biological clock in cyanobacteria

M.Ishiura, T.Kondo (Natl. Inst.for Basic Biology)

10:25 - 11:05

Neural regulation for light-induced c-fos in the circadian oscillator system of golden hamster

H.Abe (Hokkaido Univ.)

11:05 - 11:45

Molecular cloning of a novel gene mp41 under control of the circadian clock in mammals

N.Ishida (NIBH)

11:45 - 12:25

Light, transcription factors and circadian rhythms in the SCN

J.M.Kornhauser (Northwestern Univ., U.S.A.)

Lunch 12:25 - 13:30

Session III : Cellular Mortality and Immortalization

Chair: Y.Mitsui and R.Reddel

13:30 - 13:40

Introduction for cellular mortality

Y.Mitsui (NIBH)

13:40 - 14:20

Studies on genes related to aging and immortalization of human cells

M.Namba (Univ.of Okayama)

14:20 - 15:00

Mortalin: a hsp70 family member that links mortal and malignant phenotypes in NIH 3T3 cells

R.Wadhwa (NIBH)

15:00 - 15:40

Modulation of cellular senescence

D.Ayusawa (Univ.of Tokyo)

15:40 - 16:20

Genetic changes during immortalization of human cells

R.Reddel (Children's Medical Res. Inst., Australia)

16:20 - 17:00

Isolation and characterization of multiple novel genes that are overexpressed in senescent human fibroblasts

H.Saito and S.Goldstein (Univ. of Arkansas, U.S.A.)

March 10, 1995

Session IV : Crystallization of Protein Supramolecules

Chair: S. Yoshikawa and A. Ducruix

9:30 - 10:15

Crystallization of membrane proteins

S. Yoshikawa (Himeji Inst. Tech.)

10:15 - 11:00

X-ray crystal structural analysis of membrane proteins

T. Tsukihara (Tokushima Univ.)

11:00 - 11:45

Effectiveness of ions on the solubility and crystal growth of proteins

A. Ducruix (C.N.R.S., France)

Lunch 11:45 - 13:15

Chair: S.D. Durbin and Harata

13:15 - 14:00

Protein crystallization research at NIBH

M. Ataka (NIBH)

14:00 - 14:45

Fundamental physical aspects of protein crystallization

S.D. Durbin (Carleton College, U.S.A.)

§ 編集後記

第83号の会員通信をお届けいたします。今年度より学術奨励賞が例年より早く決定するようになりました。これは春の学術総会に受賞者が出席できるようにとの配慮からであります。会員通信でも次号には受賞者からのコメントを掲載する予定にしております。

私事ではありますが、12月に九州から仙台へ移ってまいりました。暖冬とはいえ、私にとっては寒い冬になりそうです。皆様も季節柄くれぐれも御自愛ください。

(Y. S.)

平成6年6月から平成6年10月末まで
(*印は発送先です)

§ 新入会員

氏名	現住所	所属機関・所在地
常盤孝義 千		工技院融合研 *〒305 茨城県つくば市東 1-1-4
	☎	☎0298-54-6222
石黒繁夫 千		日本たばこ産業(株)医薬総合研究所 *〒569 大阪府高槻市紫町 1-1
	☎	☎0726-81-9710
小池学 千		三菱化成生命科学研究所 *〒194 東京都町田市南大谷 11
	☎	☎0427-24-6256

§ 退会

氏名	機関名
下条寛人	国立予防衛生研究所
増田秀雄	甲南大学理学部
森陽一	大阪府立成人病センター
小泉義夫	御木本製菓(株)
信太隆夫	国立相模原病院
中川成之輔	東京都多摩老人医療センター
日本インターメッド(株)	

